

耳鼻咽喉科領域から分離される嫌気性菌について

名古屋市立大学耳鼻科 馬 場 駿 吉・間 宮 敦
鈴木 昌

耳鼻咽喉科領域は構造が複雑で、入り組んだ洞や管腔が多く、一旦そこに炎症が生ずると粘膜の腫脹などにより、閉鎖性の洞腔を生じやすいという解剖学的特殊性がある。従つて嫌気性菌の棲息にはかなり好条件を備えていると推定されるわけで、この点に着目して以前より慢性副鼻腔炎について嫌気性菌の検索をして来たが、今回はその成績に最近得た中耳炎や種々の閉鎖性膿瘍腔における検索成績を若干加えて報告する。嫌気環境の設定には Steel wool 法, Gas-Pak 法, 高層寒天法を併用している。

慢性副鼻腔炎 208 例, 388 洞の上顎洞貯留液の検索成績では 43 例 (20.7%), 61 洞 (15.7%), 検出株数で 64 株の嫌気性菌を検出した。このうち嫌気性菌のみの検出のみが 21 洞 (5.4%), 好気性菌とともに検出したものが 40 洞 (10.3%) で、好気性菌との共生を営むものが多くみられた。64 株の同定成績は *Peptostreptococcus* に属するものが 27 株 (42.2%), 次いで *Peptococcus* が 24 株 (37.5%), *Bacteroides* 7 株 (10.9%), その他 *Veillonella*, *Corynebacterium*, *Clostridium* が各 2 株で 3.1% となつている。すなわち、芽胞菌は非常に頻度が低くほとんどが従来弱毒菌と言われていた無芽胞嫌気性菌である。好気性菌との共生状況をみると、*Peptococcus* + *Staphylococcus epidermidis*, *Peptostreptococcus* + *Staphylococcus epidermidis* の組合せが多く、その他では *Peptostreptococcus* と *Pseudomonas aeruginosa* または *Klebsiella* のごとく好気性グラ

ム陰性桿菌との組合せが多い傾向をみた。分泌物の性状からみると、濃厚な膿性で悪臭のあるものからの検出率が高いように思われた。これらの菌株の抗生剤感受性では一般的に SM, KM などのアミノ配糖体系のものに低いが, PC 系, EM, CP, TC など耐性傾向はあまり認められない。

次に慢性中耳炎手術例の成績では 9 例中 2 例に乳様洞あるいは鼓室内分泌物および粘膜内より同種の嫌気性菌を検出した。1 例は *Peptococcus*, 他の 1 例は *Corynebacterium* で、前者は *Staphylococcus epidermidis* を同時に検出している。

閉鎖性膿瘍腔症例では扁桃周囲膿瘍 5 例, 咽後膿瘍・化膿性顎下腺炎・歯肉膿瘍・急性上顎洞炎の各 1 例の計 9 例中 8 例, 89% の高率に嫌気性菌を検出し、このうち 7 例は嫌気性菌単独症例であつた。これら症例のうち、*Peptostreptococcus* や *Bacteroides* 検出例には悪臭がつよく、この点、慢性副鼻腔炎で検討した成績に一致する。

以上の成績からみて慢性副鼻腔炎・慢性中耳炎においては嫌気性菌への配慮も必要であり、また閉鎖性膿瘍を形成するものでは本菌の臨床的意義をかなり重視せねばならぬと考える。

〔質問〕粟田口省吾 (弘前大): 培養時間はどのくらい必要か。

〔応答〕馬場駿吉 (名市大): 発育の遅いものでは 2~7 日間の観察が必要である。